



《発掘調査の概要》

建物群東側の調査（纏向遺跡第180次調査）

1. はじめに

桜井市教育委員会では桜井市大字辻56番1において纏向遺跡の第180次調査を実施しました。この調査は平成20年度から行われている範囲確認調査の7回目の調査となります。今回も土地所有者や地元関係者の方々から多大なるご協力をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

さて、今回の調査の目的は、これまでの範囲確認調査で検出した3世紀中頃以前（庄内3式期以前）の計画性が高い建物群（建物B、C、D）よりも東側の遺構の状況を確認することです。一連の範囲確認調査では初めてJR桜井線の東側を調査することとなりました。調査期間は平成25年10月30日から平成26年2月24日までで、調査面積は205㎡です。

なお、出土遺物の整理作業を経ていないため、現時点で各遺構の厳密な時期決定を行うことは困難ですが、調査段階での所見に基づいて解説したいと思います。



写真1 これまでの調査地と今回の調査地の位置（上が北）



2. 検出された遺構と遺物

主な遺構として、2棟の建物と溝、柱列を検出しています。調査地は現況で水田となっており、標高は約75.3mです。東西10.0m、南北20.0mの調査区を設定しています。遺構検出面は浅く、標高はおよそ74.9mです。線路の西側より遺構検出面は約0.6m高くなっています。

これまでの範囲確認調査では、第162次調査地や第166次調査地を中心に、複数時期の遺構面が存在することが確認されていますが、東にいくほど上部の遺構面を構成する整地層や包含層が薄くなるのがわかっています。これまでの範囲確認調査地の東端にあたる今回の調査地では整地層は確認できず、遺構面は地山直上の1面であると考えています。ただし、調査区の南側の一部には黒褐色土で埋まった河道（ないし溝？）SX-1001があり、その上面でも遺構を検出しています。地山直上の遺構面と河道埋没後の遺構面は一体のものと考えています。非常に柱穴の数が多く、遺構密度が高い点は建物群を検出したJR桜井線よりも西側の調査区とよく似ています。なお、出土遺物の大半は3世紀から4世紀（庄内式期から布留式期）のものです。

(1) 建物

建物F 東西2間（約3.4m）かそれ以上、南北3間（約6.7m）を数えます。一辺が0.4～0.6m程度の隅丸方形の柱穴が多いようです。柱穴は遺構検出面から0.3～0.4m程度の深さが残存していました。北東隅の柱穴のみ柱材の可能性のある炭化材が残っていました。炭化材が柱材であるとする、柱は幅が約15～16cmの材を用いていると考えられます。一部の柱穴は3世紀後半（布留0式期）の土坑に壊されています。建物Fは真北に対しておよそ4～5°西に振っており、3世紀中頃以前（庄内3式期以前）の建物B・C・Dとほぼ平行していることや、中軸線を一致させることから、建物B・C・Dと共存していた可能性が考えられます。



写真2 第180次調査区全景（上が北）



写真3 建物F柱穴の炭化材



写真4 建物Fと建物G（北西から）

建物G 南北2間（約4.2m）をはかりますが、建物の大部分は調査区外西側へ展開すると考えています。その場合東西の柱間は2.8m以上となるでしょう。柱穴は長辺が約0.8～1.1m、短辺が約0.5～0.7mの長方形で、柱の沈下を防ぐためか柱穴下層に礎板（木材）を敷いている様子がうかがえました。北端の柱穴が3世紀末～4世紀前半の溝に壊されており、それ以前の建物と考えられます。真北に対して西に約16～18°振っており、これまで検出している3世紀中頃以前の建物群や3世紀後半以降の建物（建物E）とは異なる方位をもちます。



写真5 建物Gの礎板（南から）



写真6 SD-1002（北から）

(2) 溝・柱列

SD-1001・SD-1002・柱列2 SD-1002は南北溝で幅約2.5m、長さ20m以上、深さ約0.9mをはかります。多量に含まれていた土器から、布留0式期（3世紀後半）に下層が埋没し、布留1式期（3世紀末～4世紀前半）に上層が埋まったと考えています。正方位に近い直線的な溝で、真北に対して約2～3°東に振っています。SD-1001はSD-1002に直交する東西溝で、幅約0.8m、長さ6.6m以上をはかります。SD-1002と共存していたと考えています。ただしSD-1001の方が先行して埋没したようです。柱列2はSD-1002の西側に平行して南北に伸びますが、SD-1001を越えて北側には伸びないと考えられます。柱穴の間隔は約2.0mで、大部分の柱穴で柱材やその腐朽痕跡を確認でき、抜き取り痕が認められる柱穴はありませんでした。特に南側から3つ目の柱穴では柱材が遺存しており、幅が約15～16cmの材を用いていることがわかりました。SD-1002と共存する可能性があります。

SD-1001・SD-1002・柱列2は纏向考古学通信第3号5ページで紹介しました、第170次調査で検出した3世紀後半以降の大規模な建物（建物E）と角度を一致させており、かつ溝の埋没年代（3世紀後半から4世紀前半）と建物Eの年代（3世紀後半以降）に矛盾がないことから共存していた可能性も考えられます。

SD-1001・SD-1002・柱列2は纏向考古学通信第3号5ページで紹介しました、第170次調査で検出した3世紀後半以降の大規模な建物（建物E）と角度を一致させており、かつ溝の埋没年代（3世紀後半から4世紀前半）と建物Eの年代（3世紀後半以降）に矛盾がないことから共存していた可能性も考えられます。

SD-1006・柱列1 調査区北側で検出した東西溝で、幅約2.5m、長さ10m以上、深さ約0.6mをはかる東西溝です。調査区外の東西に続いていくと考えられます。SD-1006に土が堆積した後にSD-1002が埋まっていることから、両者は共存しないと考えられます。SD-1002との切り合い関係と土器から布留0式期（3世紀後半）に埋没したものと考えられます。真西に対して北へ約7～8°振っています。SD-1006の南側には、平行して柱列1が東西に伸びています。3間分を確認しており、柱穴の間隔は約2.9mとなっています。



写真7 柱列2の柱材



